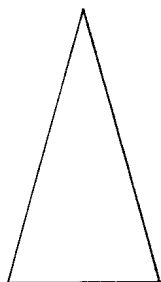




生田萬
の
戯曲集

夜の子供

而立書房



戯曲集
の生田萬
ぐた
よろず

夜の 子供

而立書房

夜の子供 生田萬の戯曲集

1986年12月25日 第1刷発行

定 価 1600円

著 者 生田萬

発行者 宮永捷

発行所 有限会社而立書房

東京都千代田区神田神保町1丁目20番地
振替・東京9-174567／電話 03(291)5589

印 刷 科学図書印刷株式会社

製 本 大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかいたします。 0074-0893-3359

©Yorozu Ikuta, Printed in Tokyo, 1986

目次

夜の
子供

5

小さな
王國

135

上演
記録

278

装幀・羽良多平吉
装画・伊藤桂司

夜の子供

生田萬の戯曲集

夜の子供

Catch me in the midnight

■登場人物

ヤスベール／カエサル

カシミ

ヒルマ

父（和正）

母（ヨキコ）

小っちゃいヤスベール

もう一人のヤスベール

田手上ハジメ

ユズル

スリル亀吉

ナンバ

＊

院長

看護婦1

2

電報配達

葬儀社社員1

2

オートメーション工場の主任

工員たち

おばさん

刈賀先生

生徒たち

＊

夜の子供バンド

ロボットのロンちゃん

仔猫のフィリックス

双児のシャム1号

2号

地球男

銀髪少女ミリアム

怪人笑い仮面

これは、生まれてこれなかった思い、そうなければいいアと思いいながらならずにしまったこと、そのときは思いもかけずにいたこと、やりそこねたことエトセトラをめぐる物語である。

いいかえれば、これはマンガである。

ありもしないコト、いもしないモノたちと登場人物とが真剣に格闘する姿はときとしてグロテスクで、ときとしてオカシク、またときとして美シクもあり、そしてそれはマンガである。

だからこの芝居は、異星の野外劇場にいきなり迷いこんだような、そんな気分のなかで始まるのがい

い。
異星の野外劇場とは、ちょっと昔に夢見られた遠く懐かしい未来の劇場であり、記憶のなかで自己増殖をつづけるいつも新しい過去の劇場だ。

つまりそこは、冒険するノスタルジアの世界なのである。

ブローグ

客席と舞台の見境もなく、紙の月や紙の星やその他いろいろが散りばめられた劇場。

それらのかげから、書割りのマンガ然としたキャラクターたちが顔をのぞかせている。どこかでいつか出会ったように懐かしく、そのくせどこにもいそうもない、まるで右脳のオモチャ箱からふってわいたような彼らは、たとえばロボットのロンちゃんであり、仔猫のフィリックスであり、双児のシャム1号・2号であり、地球男であり、銀髪少女ミリアムであり、怪人笑い仮面である。

舞台奥にはベッドが置かれ一人のこれまた少女マンガ然とした少女が眠っている。彼女は、この物語の主人公ヤスベーによってとりあえず夢見られた二十五年前の「小っちゃいヤスベー」である。（たしかに背格好は七歳の少女だし、顔にかぶったマスクには星のまたたくつぶらな瞳。）

さて、ペーパームーンやペーパースターやその他いろいろが次第に輝きを増す夜の頃に、芝居は何気なく始まり、書割りのキャラクターたちが動き出す。笛や太鼓やシンバルやアコーディオンなどなどを鳴らしながら、この物語の裏方をつとめることになる彼らを「夜の子供バンド」と呼ぶことにする。あれこれとかまびすしく口論し合いつつ、動き出そうとする物語の準備を始めた夜の子供バンドはベッドで眠りつづける小っちゃいヤスベーを抱え上げ、舞台中央に横たえると、そのポーズをためつすがめつし、傍にシガレットとマッチを置き……大真面目に仕事を遂行する彼らの姿は、ほとんど遊んでいるかと思えない。

そこへ、下手から物語の足音が迫る。

クモの子散らすように夜の子供バンドたち、大あわてで自分の位置へ戻ると再び元の書割りになる。
下手から一人の寝間着姿の少女、ケンケンしながら登場。

少女

(行手を塞いで横たわる小っちゃいヤスベーに) 姉ちゃん。……ちよいと姉ちゃん。そないなところだなしてますねん。

少女の呼びかけにより、物語が動き出した。

(実際の舞台では、少女に応える小っちゃいヤスベーの声は、二十五年後のヤスベーによって、かげで語られることになります。)

(小っちゃい) ヤスベー ごらんのとおりですわ。

少女 こない道の真ん中にねてもうてからに。

(小っちゃい) ヤスベー ほっといてんか。

少女 いつからこんなんしてますねん。

(小っちゃい) ヤスベー 鶴は千年、うちは寝て万年。

少女 しかしながら、これではうちが通れまシェん。

(小っちゃい) ヤスベー あんさん、オンでっか、メンでっか、

少女 ヒトを鶏みたいにいわんといて。

(小っちゃい)ヤスベー オナゴは通れへんで。こっから先やオナゴに用はないんじゃ。

少女 なんデや。

(小っちゃい)ヤスベー オナゴはうちひとりでたくさんじゃと和正がゆーたんじゃ。

少女 和正なんて知らん。

小っちゃいヤスベー、ムックリと起き、あぐらをかいて傍のシガレットを一本くわえると、マッチで火をつけていた。

少女 (小っちゃいヤスベーの隣に座って)なあ、だれやの、和正ゆーて。なあ。——そや。あんたの

コレや。なァんや、そやそや。でっシャろ。

(小っちゃい)ヤスベー まあ、あんさんも一服どーだす。(ト、シガレットをさし出す。)

少女 (パッケージを見て) これは!?! キンコーモリ。

少女、金 蝙蝠ゴールデン・バットを一本抜き出す。

小っちゃいヤスベー、マッチをシュツと擦って——。

(小っちゃい)ヤスベー マッチ擦るつかのま海に霧深し——。

少女、小っちゃいヤスベーのマッチでシガレットに火をつけ、うまそうに紫煙をくゆらせて――。

少女 霧は秋でんな。

(小っちゃい)ヤスベー しかり。春にたつのは霞といいまんな。

少女 (紫煙の彼方の虚空に) さだかに見えぬ中空に、おぼろにたなびく……。

(小っちゃい)ヤスベー あんさんみたいや。

少女 なんだす？

(小っちゃい)ヤスベー カスミやんけ。

少女 うちがカスミでっか。

(小っちゃい)ヤスベー 花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風。

春風が吹き抜ける。

間。

少女 (ジッと小っちゃいヤスベーの横顔を見て) なんでやる。よう見ると、あんさん、うちによー

似とるわ。

(小っちゃい)ヤスベー やめとき。

少女 でもなんでやる。なあ。和正ゆーてだれやの。

(小っちゃい)ヤスベー　グッバイ。

少女　え？

(小っちゃい)ヤスベー　帰るんや。あんさん、もう帰り。

少女、泣きながらも来た道を帰りかける。

(小っちゃい)ヤスベー　(少女の後ろ姿に)　メメント・モリ。

少女　(ふりかえり)　めめんともり？

(小っちゃい)ヤスベー　許してや。……許してや。……

顔見合わせ、たたずむ少女と小っちゃいヤスベー。

夜の子供バンド、再びカタコト動き始め、二人のまわりをグルグル巡りながら奏でる懐かしくもグロテスクなネオエスニック・サウンドとともに――暗転。

Scene 1 帝王切開

ゆっくりと明転すると、そこは売れない少女マンガ家ヤスベ―先生ことナガヨ・ヤスミの仕事部屋。
舞台前面下手にうずたかく積み上げられた少女マンガ雑誌の山。その山に半ばうずもれるように仕事
机が置かれ、その机につぶしてうたた寝をしていた三十二歳のヤスベ―が夢にうなされていた。
後ろからヤスベ―の様子をのぞきこんでいる少女。ヤスベ―の夢からそのまま抜け出したような少女
のままの妹カスミだ。

カスミ どうしたの？

ヤスベ― (なおもうなされて)……。

カスミ ねえ、ヤスベ―。

ヤスベ―、ハッと目を覚まし、顔を上げると、荒い息をつく。

ヤスベ― ……思い出していた。

カスミ え？

ヤスベ― あの夜のこと。台風がこの街に近づいて……ボクね……ボクね……。

カスミ　ねえ、なんのこと？

ヤスベー　おまえの生まれた夜のことさ。……カスミ。

遠くはるかに目をやる二人の上にいきなりモノスゴい雷鳴が轟いて——暗転。

（以下、物語は舞台前面のヤスベーの仕事部屋と、舞台奥のマンガじみた異空間とがもつれあいながら共時的に進行することになります。）

声　（闇の中から）だれじゃ！　お産の最中に電気を消す奴は！

さらに闇の中から二人の女の声が応えて——。

声 1・2　停電です院長。

声（院長）　なに停電！？　ええい諸君、なんでもかんでも明かりを持ってッ！

声 1・2　ハイハイ院長。

ト言うや、客席に向かって懐中電灯の明かりが二つ灯り、フラフラと場を移ろって、舞台奥のベッドの上の白い太腿と、その股間にへばりついた禿頭を照らし出す。
懐中電灯をかざしている二人の看護婦——。